様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２３日現在

機関番号：４２７２３
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２００５１
研究課題名（和文）　宅孝二の作品／著作目録作成のための基礎的研究

研究課題名（英文）　A study of the catalogue of Taku Koji’s works

研究代表者
大地　宏子（OCHI HIROKO）
鶴見大学短期大学部・保育科・講師
研究者番号：８０４１３１６０

研究成果の概要（和文）：銘酒澤亀の醸造家で堺酒造株式会社の設立など堺市産業界の重鎮であった宅徳平を祖父に持つ宅孝二は、幼少時より邦楽や芸事を嗜み育った。パリ留学後、最初に奉職した東京女子高等師範学校での舞踊曲の作曲や、東京オリンピックの女子床運動におけるピアノ伴奏など、彼にとっての音楽は身体運動と呼応しあう存在であった。また、数多く手掛けた映画音楽には幼少時代に体験した邦楽と晩年に傾倒していったジャズへの憧憬がみられ、それらが彼の創作活動の基底をなしているものと思われる。

研究成果の概要（英文）：My study concerns the career of Japanese pianist and composer, Taku Koji. Born into a famous Sakai sake-brewing family (his grandfather created the well-known brand ‘sawakame’), Koji was exposed to traditional Japanese arts and music from early childhood. As a young man, after studying music composition in Paris, he taught and worked on developing dance music in a girls teacher-training school in Tokyo. He worked on creating piano accompaniment for female floor exercises in the up-coming Tokyo Olympic Games, in 1966. For him, music provided an essential support to physical motion, and much of his work was designed with dance and floor exercises in mind. The music he grew up listening to as a child, even traditional Japanese music, provided him with a yearning to explore a wide variety of music in later life, including jazz, and music for films. In my study, I explore the various strands of which comprise his highly creative output over the years.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術学、芸術史、芸術一般
キーワード：宅孝二、邦楽、ジャズ、舞踊、映画音楽、東京オリンピック、エコール・ノルマル音楽院、ソルフェージュ

１．研究開始当初の背景

今ではその名を知る人も少なくなってきているピアニスト／作曲家の宅孝二（1904［明治 37］年～1983［昭和 58］年）は、か

つて「日本のクラシック界の異端児」として知られていた音楽家である。東京藝術大学のピアノ科主任教授でありながらジャズに夢中になり、キャバレーに出演したり、日劇のショーの伴奏をしたりするなど、その破天荒なエピソードには事欠かない。だが同時に彼は、音楽雑誌などに相当な量の著作を発表しており、そこでは主として音楽教育や演奏論に関わる主題について、極めて真摯な思索が繰り広げられている。残念ながら生前の彼は、そのエキセントリックな振る舞いだけを興味本位で取り上げられることが多く、また本人が、自らの音楽教育観／実践を「メソード」等の形で体系化して広めるといったことを好まなかったため、創作や著作がまとめて出版されることはなかった。今や彼と個人的に交渉のあった人々も高齢となって、ほとんど今日では忘れられた存在になっているといっていいだろう。

しかしながら、彼は永井荷風や千田是也、中嶋健蔵、渡辺貞夫といった、きわめて多彩な交友関係をもっていて、日本の戦後文化史を理解するうえでも欠かすことの出来ない中心人物である。また、彼は当時のアカデミックな音楽界に対して強い批判意識をもって活動したがゆえに、彼の創作・著作・活動は近代日本における洋楽受容のありようを理解するための側面鏡としてきわめて有効である。しかも、近代日本の教養主義的なクラシック受容も、戦後に生まれてきた機能主義的なそれ（斎藤メソードなどの技術重視の受容）が明らかに飽和点に達しつつある今日の状況において、宅孝二がとりわけその著作活動（それは常に実際の音楽活動を伴っていたが）を通して提起した諸問題は、かつて以上にアクチュアリティーを増している。

２．研究の目的

本研究の目的は、宅孝二の音楽活動（作曲、著作、教育、演奏を含む）に、日本の戦後音楽史の中でしかるべき評価を与えるための基礎資料を整理することにある。そのために何より必要なのは、著作および作品の目録を整理し、それらに関わる基本的な伝記事項を明らかにすることである。

まず著作についてであるが、宅孝二は戦中から戦後にかけての様々な雑誌で、膨大な量のエッセイ等を残している。それらは、例えば伝記的なものの場合、フランス留学中の様々な知識人との交友など文化史的にも興味深いが、最も重要なものは演奏論に関わるものであろう。ソルフェージュ、ピアノ演奏のメソード、舞踏と音楽の関係などが主題になっているが、そこでは常に「身体」の概念が中心に据えられていて、ポストモダン時代の芸術における身体性への着目をはるかに先取りしていた。例えば彼は、邦楽を利用したソルフェージュを構想していて、日本人が西洋音楽を受容する場合の身体的差異への着目の点でも非常にユニークな視点を持っていた（後年のジャズへの接近や多くの舞踊家との共演、東京オリンピックでの女子体操のピアノ伴奏といった活動からもそれが見てとれるだろう）。つまり、グローバル化時代の西洋音楽受容に伴って生じる様々な問題に対して極めて鋭敏に予見していたのだ。

また、宅孝二は作曲家としても新古典主義的な作風による多くの秀逸な作品を残しているが、出版に熱心でなかったためにほとんど演奏されることがない。いわゆる前衛の動向のみを追う直線的な進歩史観による戦後日本音楽史への反省のもと、大澤寿人や安部幸明といったモダン様式にとどまり続けた戦後作曲家の創作が改めて脚光を浴びている今日、作曲家としての宅孝二を再評価することの意義も小さくはない。出版された作品については調査をほぼ終えているが、まだ日本近代音楽館などにはいくつかの草稿（弦楽四重奏や歌曲）が残されており、また彼の重要な創作分野であった映画音楽についてはまったく手つかずの状態である。これらについて、作曲年などの基本データを明らかにしたうえで作品目録を作ることが、この研究の第二の課題である。

３．研究の方法

（１）遺族・知人・かつての弟子等から宅孝二の縁故についての聞き取り調査を行う。その出自を明らかにすることで、彼の思想や音楽観（音楽活動）を理解するうえでの礎とする。

（２）宅孝二の作品（音楽作品、エッセイなど）の収集を行い、（１）で述べた聞き取り結果を照合しつつ、可能な限り正確な伝記的データの作成を行う。その結果は順次、申請者の勤務校における紀要のかたちで、すみやかに公表する。宅孝二についてのまとまった伝記はまだなく、これらはそれについての初めての基礎資料となるはずである。

①自筆譜の調査：日本近代音楽館には相当量の宅孝二の未公開の楽譜が保管されており、また遺族（長女の宅朱美氏）のもとにも手稿が残されている。順次これらの調査を行い、上に挙げた伝記的データと照合しつつ、基本的な作品目録を作る。

②著述の収集：東京藝術大学／国立音楽大学等の附属図書館、および日本近代音楽館、東京文化会館、国立国会図書館などが所蔵する音楽雑誌を網羅的に調査し、掲載された著述を収集する。

③映画作品（DVD など）の収集：宅孝二は生

前 50 近くの映画音楽を書いているが（その中には市川崑といった著名な監督による作品も多い）、それらの映像を収集する（その中には、かつてビデオとして発売されていたものの、今日では絶版になっているものも多い）。彼は身体の動きと音楽の関係について深い興味を寄せており、東京オリンピックの女子徒手体操の伴奏ピアニストを務めたのも、舞踏家との共演も、こうした文脈の中で理解されるべき活動であったが、映画における画面の動きと音楽の関係についても検討されなくてはならないだろう。

（３）宅孝二が渡仏し、在籍していた 1920 年代後半から 1930 年代におけるエコール・ノルマル音楽院の音楽（ピアノ）教育を調べる。宅はパリへ二度留学し、エコール・ノルマル音楽院にてコルトーにピアノを師事するだけでなく、有名な音楽理論教師ナディア・ブーランジェの授業に出て、そこから身体と音楽に関わる様々なアイデアを得たと思われる。東京藝術大学における初期ソルフェージュ教育の調査との関わりで、エコール・ノルマルにおける当時の教育内容を調べることは不可欠である。

４．研究成果

（１）宅孝二の出自と縁故

これまで宅孝二の縁故についてはほとんど明らかではなかったが、堺市立中央図書館での調査により、彼の親戚によって同図書館に寄贈された宅家の家系図を入手できた。それによると、宅孝二は父徳平と母花子の次男として生まれ、他に兄弟姉妹８人がいる。唯一存命であった末弟（六男）の六男氏への取材依頼の直後、病により平成 22 年に亡くなられたため、取材を行うことが出来なかったが、五男の和彦氏の奥様とご子息への取材により、パリ留学前の生活を綴った宅のエッセイや写真などを入手できた。

宅孝二の祖父、宅徳平は、堺市の『人物史』等に掲載されている著名人であった。銘酒澤亀で財を築き、アサヒビールの前身、大阪麦酒会社を創業した実業家の鳥居駒吉とともに堺酒造株式会社の設立における中心人物であった他、阪堺鉄道（南海鉄道の前身）の敷設、公共事業への莫大な寄付、著名な大会社の重役など、明治期における堺市社交界および産業界の重鎮であった。

当時、政府の高官や財界人との交遊を図ることを目的に、宅徳平ら酒造家をはじめ実業家たちの社交倶楽部として旭館（あさひかん・アサヒビールの由来）が開設されたが、風光明媚な花街に建てられたこの館は、芸妓らが通う富豪の遊場所としても知られていたようだ。宅孝二は伝記の中で、芸事を好み長唄の名手であった祖父や清元を得意とした父の影響で、芸者たちの音曲や踊りを幼少の頃から見物していたこと、また謡や仕舞や三味線を仕込まれたことを書き綴っているが、邦楽によって形作られた彼の最初期の音楽観は、恐らくこの旭館に由来するものと思われる。商業都市として栄え、茶人の千利休を生んだ堺の街に生まれ育ったことが、その後の彼の音楽活動を形成するルーツとなったことは間違いないだろう。

（２）宅孝二の作品収集

①音楽作品目録の作成：日本近代音楽館での調査と、富樫康著『日本の作曲家』（音楽之友社）を参照し、宅孝二の作品目録を作成した。

近代音楽館所蔵以外の作品には、宅が二度目のパリ留学を終えて帰国した昭和 12 年から、最初に奉職した東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の「体育科」（当時はまだ独立した音楽科は存在せず、体育と音楽を中心に学ぶ学科として「体育科」が開設されていた）で教鞭をとっていた間に作曲された舞踊曲もいくつかある。同校体育科の教授で、幼児体育（遊戯）やダンスの先駆者の一人であった戸倉ハルは、宅に創作ダンスや学校ダンスの作曲を依頼していたが、これらは外部に出版されなかったため入手は困難であった。しかしながら、その当時東京女子高等師範学校に在籍し、宅のピアノレッスンを受けていた外山友子氏（元いわき短期大学教授、取材後の平成 22 年に永眠された）より、宅の作品も収められた同校の舞踊曲のテキストを寄贈された。また、外山氏への聞き取り調査より、彼が同校で舞踊曲を作曲していた経緯や、ピアノのレッスンの内容等も具体的に知ることができた。

他に、同じく在籍当時、宅にピアノレッスンを受けていたお茶の水女子大学名誉教授の松本千代栄氏の構成による文部省学習指導要領準拠の「小学校ダンス」「中学校 高等学校ダンス」（コロムビアレコード）にも、宅の作品がいくつか収録されている（音源有）。こうした女高師時代における舞踊曲の作曲が原点となり、以後東京オリンピックでの女子の徒手体操の伴奏ピアニストを務めたり、舞踊の作品を数多く作曲したり身体の動きと音楽の関係について深い興味を寄せていたものと思われる。

今後、これらの楽曲分析を行い、随時発表していく予定である。

②著述の一覧の作成：宅は 1934 年～1981 年にわたり、『音楽世界』『音楽の友』『音楽

芸術』『レコード芸術』『ムジカノーヴァ』などの音楽諸雑誌に数多くの論考を寄せており、その数は80余りある。以下に示した種別ごとの論考の数より、宅の活動が多方面にわたっていたことが分かる。

・楽理一般・楽曲について…20
・演奏評…8
・ピアノ奏法について…23
・ジャズについて…4
・映画音楽・随想・その他…21
（上記の音楽雑誌に掲載された宅孝二に関する記事…5）

③映画音楽の特徴：宅孝二が手掛けた映画音楽のうち、高度経済成長期直前のサラリーマンを風刺した代表的な喜劇映画「満員電車」「誰よりも金を愛す」「恋愛騎士道」を検証した。いずれもシニカルな音楽表現が印象的だが、とりわけ「誰よりも金を愛す」では、1920年代に流行したミヨー風のジャズ・イディオムやメカニックなリズムに日本民謡のパロディーを組み合わせるなど、宅のブラックユーモアの感覚が炸裂している。こうしたジャズと邦楽を合わせた楽曲は、ジェノヴァの音楽コンクールで受賞したピアノ曲《ソナチネ》をはじめ、彼の楽曲の多くに見られる手法であり、幼少時代に体験した邦楽と晩年に傾倒していったジャズへの憧憬が、彼の創作活動の基底をなしていることがうかがえた。

（3）パリ留学における音楽研究

宅の二度に渡るフランスでの留学生活を明らかにするため、彼が籍を置いていたエコール・ノルマル音楽院と、音楽院の資料を所蔵するマーラー資料館を中心に調査した。

現在、アルフレッド・コルトーの後任を務めるジャン・ルイ・マンサール教授（同音楽院副学長）を訪ね、宅孝二が在籍していた記録や同時期の音楽教育に関する資料が残されていないか問い合わせたが、それらは発見されなかった。

①エコール・ノルマル音楽院における音楽教育と教授陣：当資料館にはエコール・ノルマル音楽院の教育システムと教育法についてまとめた修士論文が所蔵されており、音楽雑誌 *Le Monde Musical* に掲載された1919年の創立時から1939年に至る音楽院の教授陣とその授業カリキュラム（集中講義等も含む）の広告などから同音楽院の教育システムの変遷が明らかにされている。これらは、宅孝二が1927年から1934年にかけて同音楽院でいかなる教授たちの音楽教育を受けていたかを推察する重要な資料である。

例えば、1930年の当音楽雑誌に掲載された広告には６月に行われる「アルフレード・コルトーの演奏による10講座」として；

・セザール・フランクの《プレリュードコラールとフーガ》
・ガブリエル・フォーレの《ファンタジー》《バラード》《無言歌》ほか
・クロード・ドビュッシーの《版画》《喜びの島》《子どもの領分》《前奏曲》ほか
・モールス・ラヴェル《鏡》《ソナチネ》《夜のガスパール》《クープランの墓》ほか

などの８人のフランスの作曲家によるピアノ曲が紹介されている。その他の年度にはモーツァルト、バッハ、ベートーヴェン、シューベルトなどフランス以外のありとあらゆる作曲家の曲が取り上げられ、ピアノ以外の楽器の講座も数多く紹介されている。

また、同音楽院の沿革史によると、1927年に現在のマルゼルブ大通りに移転し、教授陣には創始者のアルフレッド・コルトーをはじめ、イヴォンヌ・ルフェビュール、ナディア・ブーランジェ（ピアノ）、ワンダ・ランドフスカ（クラヴサン）、ジャック・ティボー（ヴァイオリン）、パブロ・カザルス（チェロ）、ポール・デュカ、アルチュール・オネゲル（作曲）ら錚々たる名を連ねていた。宅の自伝にもコルトーやブーランジェやオネゲルらに師事したことが綴られている。

②ナディア・ブーランジェの音楽教育：宅が個人的に師事していた音楽教育家のナディア・ブーランジェに関する書籍；

・『ナディア・ブーランジェへのインタビュー』（Bruno Monsaingeon, *Mademoiselle Entretiens avec Nadia Boulanger*）
・『ナディア・ブーランジェ』（Jeróme Spyoket, *Nadia Boulanger*）

などには、宅がエッセイの中で「（ブーランジェ女史の自宅で）バッハのカンタータ全曲の研究会で一年間講義を受けた」と語っていた音楽レッスンの詳細が記されており、世界各国から集まった学生たちがここで、和声法、ピアノ奏法、対位法、楽曲分析など多岐にわたる音楽教育を受けていた。宅が最も尊敬し、薫陶を受けたというブーランジェ女史の教えが、宅の音楽観を形成する上でどのように影響したのか、より具体的に検証していきたい。

（4）女子徒手体操のピアノ伴奏

女子の徒手体操（床運動）においては、伴奏音楽が非常に重要な役割を担っており、とりわけソ連の選手の音楽と運動の調和という抜群の技能は他を寄せ付けない高さを持っていたという。また、ソ連や東欧諸国では一流の作曲家が個々の選手演技特性に合わせた伴奏音楽を生演奏で行っていたのに対

し、日本ではテープに録音したものを使っていたため、音楽と演技がちぐはぐになることが多かった。

そこで、日本で初めて女子徒手体操（床運動）に生のピアノ伴奏が使われるようになったのが 1964（昭和 39）年の東京オリンピックで、その時にピアニストを務めたのが宅孝二であった。彼のオリジナル曲を使った相原俊子氏をはじめ６名の女子選手たちと３年にわたり合宿練習を行った。選手の身体のコンディションによって日々千変万化する動きやリズムに、音楽も完全に同化するよう努めた宅は、体操の選手と音はどんなに密接であるかということを経験したと回想している。当時の選手たちへの取材の中で、現在日本体育大学名誉教授の池田敬子氏は、「生の伴奏によって『音が人間に合わせてくれる』ようになったことで、選手たちの負担が軽減されたことが大きなメリットであった」、と語った。

このような活動を通して、宅孝二にとっての音楽は、決してそれ自体で存在している抽象的なものではなく、実際の身体によって作り出され、舞踏や体操といった身体運動と呼応しあう存在であったことがうかがえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①大地宏子、ＮＨＫラジオ番組「子供の時間」に見る戦前の音楽教育の一考察 ―番組月刊誌『コドモのテキスト』における「特選童謡」を中心に―、鶴見大学紀要 第３部 保育・歯科衛生編、査読無、第48号、2011年、51-60頁

②大地宏子、戦前の学習指導要領の変遷と音楽科の教科書の変遷に関する一考察 ―小学校第一学年の教科書を中心に―、鶴見大学紀要 第３部 保育・歯科衛生編、査読無、第 47 号、2010 年、9-22 頁

③大地宏子、保育者／保育教育者に求められるアナリーゼ能力 ―湯山昭の童謡作品を中心に―、鶴見大学紀要 第３部 保育・歯科衛生編、査読無、第 46 号、2009 年、59-68 頁

〔学会発表〕（計２件）

①大地宏子、日本近代のピアノ教育における身体イメージの剛と柔、学習院大学身体表象文化学コース研究発表会「からだの文化 ―修行と身体像―」、2010 年７月 18 日、学習院大学

②大地宏子、戦前の NHK ラジオ放送に見る音楽番組の変遷 ―「子供の時間」における童謡を中心に―、音楽教育史学会第 12 回大会、2009 年５月９日、立教大学

〔図書〕（計２件）

①大地宏子、鈴木香代子、文化書房出版社、教員・保育士をめざす人のためのピアノ小曲集、2010 年、総 64 頁

②大地宏子、鈴木香代子、文化書房博文社、保育者のためのピアノ小曲集、2009 年、総 55 頁

６．研究組織
研究代表者
大地　宏子（OCHI HIROKO）
鶴見大学短期大学部・保育科・講師
研究者番号：８０４１３１６０